

小学校国語科における教育実践臨床研究 (2)

——授業デザインにおける「目標」と「ねがい」の関係性——

滝 浪 常 雄

A Clinical Study of the Educational Practices in Japanese Language
at Elementary School: Teacher's Classroom Objectives
and Their Desired End Results

Tsuneo TAKINAMI

はじめに

前回の論文(2009年度安田女子大学紀要¹⁾)において、「授業デザインの可能性」について論じた。これは、故藤岡完治氏が発案した授業デザイン論を、自分なりに国語科授業論として、どのように応用できるかを論じたものであった。そして、授業デザインによる国語科の授業構想²⁾としての可能性について考察した。その結果、それぞれの要素に国語科授業としての属性を与えることができた。これら6つの構成要素「目標」「学習者の実態」「教材の研究」「教授方略」「学習環境・条件」は、実際に学習指導案に盛り込まれる要素であり、国語科学習指導案としての特質を明示することができたと考えている。

しかし、これらの要素については、常に授業構想で考えられる要素であると思われるが、たぶん「ねがい」³⁾については、教師の授業に対する自分の思いや考えが示される部分であるだけに、記述することは難しいと考えられる⁴⁾。「ねがい」の記述は、教師の主観が示される。教師の主観は授業の核として十分意味があると思うのであるが、実際の記述に際しては、熟慮を要することが多い。このことは、授業に対する教師の主観=自分の考え「こうしたい」というものが、これまであまり意識されて来なかったものと推察する。

そこで、本稿では、実際に書かれた授業デザインを資料をもとに「目標」と「ねがい」の関係に着目して、なぜ教師は「ねがい」が明確化できないのか、を論じたい。

1) 拙稿「小学校国語科における教育実践臨床研究——授業デザインの可能性——」安田女子大学紀要第38号 2010

2) ここでの授業構想は、一時間の授業だけでなく、単元学習全体の構想も含んでいるものとする。

3) 国語科の「ねがい」については、前掲書1)に定義した。授業デザインを構成する要素の中心的な存在であり、教師が望むべき、学習者の学びの姿を記述することになっている。国語科としては言語文化に関わる価値、見方、感じ方と押さえた。

4) 拙稿コラム「『6つの構成要素』活用報告～大学生編～」藤沢市教育文化センター紀要 2009.3 p.52において述べたが、当時の学生に教育実習を控えて、授業デザインの指導をしておいたが、実際に使ってみると、目標とねがいが同じになってしまったり、ねがいそのものの存在に疑問をもったりと、記述の難しさを痛感して帰ってきたという報告である。

I. 国語科における「目標」と「ねがい」の関係性

1. 授業デザインの実践資料について

本稿における資料としては、2009年度本学で行われた教員免許更新講習会「言語力を高める国語科の指導」という講座の中で、ワークショップとして取り組んだ授業デザイン（以下2009資料⁵⁾と2010年度の浜松市国語科研修会「言語活動の充実を目指した国語科授業の在り方」（以下2010資料⁶⁾をもとにする。

2009資料は、講習会において、後半の講習内容であった「自分が実現したい授業」と題して、授業デザインの説明して、実際に約70分間をかけて授業デザインを書いていただいた。活動としては十分時間が確保され、全体的に授業デザインの構成要素がすべて記入されていた。後の意見・感想として授業を構想する上で、授業の全体イメージが描けることはよいことだが、「目標」と「ねがい」が同じような書きぶりになってしまうということが出された。

もう一つの2010資料は、浜松市国語科研修会において、講義の後半に演習形式として2学期以降の自分の授業をデザインしてもらうことにした。時間的に約45分間を設定した。特にこの研修では、「目標」と「教師のねがい」が一致しないように事前に投げかけた。これは、2009資料の折に「目標」と「ねがい」が同じになってしまうという問題が生じていたので、この点を補うつもりであった。結果的には、おそらく2009資料より、時間的に少なかったせいだと思われるが、構成要素のすべてを埋めることができたのは、29名の半数ほどであった。それでも「目標」と「ねがい」についてはほとんどの方が書き込んでいたので、分析に当たっては十分であると考えた。

2. 「目標」と「ねがい」の分析について

それでは、6つの構成要素の中でも「目標」と「ねがい」に着目する理由については、まず、二つの要素に絞って分析を行うのは、「目標」が、基本的に学習指導案を作成する上で、これまでに教師が最も重要視するものであるということと、「ねがい」もまた授業構想において大切にされるべき、本来の核であるということである。次に、他の構成要素は重複することはないが、「目標」と「ねがい」という要素には教師の授業に対する思いや願いが関係してくるので、「目標」との関係において、同一の要素となってしまうがちな傾向が見られるので、その関係の分析によって、差異を明確にしたいと考えたからである。なおかつ、この二つの要素の関係性が明らかになれば、今後授業を構想する上で、教師は自分の実現したい授業の構築に近づくことができるのではないかと考えたからである。

「目標」と「ねがい」の関係性における分析の視点については以下の通りである。

5) 【2009資料】

日時場所：2009年8月9日 安田女子大学

研修会：安田女子大学免許更新講習「言語力を高める国語科の指導」

対象：小学校教諭59名

内容：9月以降の担当する学年の教材

6) 【2010資料】

日時場所：2010年7月15日 天竜川・浜名湖教育センター

研修会：平成22年度国語科研修会「言語活動の充実を目指した国語科授業の在り方」

対象：小学校教諭49名及び中学校教諭9名

内容：9月以降の担当する学年の教材

- ①「目標」に記述されている内容が、学習指導要領に準じたものであるか。
- ②「ねがい」に記述されている内容は「目標」を具現化したいというものであるか。
- ③「ねがい」には学習を通して、子どもに学んでほしいことが書かれているか。

以上の視点で分析してみると、以下の結果となった。「目標」「ねがい」がそれぞれ複数の項目で書かれているので、人数以上の数になる。

表1 【2009資料】 (数値は項目数)

項 目		①	②	③
広小 教諭 59名	総数	134	145	34
	平均	2.3	2.5	0.6

表2 【2010資料】 (数値は項目数)

項 目		①	②	③
浜小 教諭 49名	総数	66	68	9
	平均	1.3	1.4	0.2
浜中 教諭 9名	総数	11	11	8
	平均	1.2	1.2	0.9

以下の結果から、

①については、ほとんど全員の教師が「目標」に記述されている内容は学習指導要領に準じたものが書かれている。しかも、「目標」を1つという教師は少なく、ほとんど2つ以上の項目を書き込んでいる。

②についての内容は「目標」を具現化されたものが多い。項目数にして、平均数では、広島県の教師で2.5、浜松小学校教師で1.4、中学校教師で1.2であり、かなり「目標」に記述する項目数より多く書いていることが分かる。しかも長文で説明している教師も多く、「目標」を具現化しようという表れであると推察される。

③については、一人に一つ書いているかどうかというところであるが、「ねがい」に学習を通して学んでほしいことを書くことは、やはり難しいことが分かる。今後、授業デザインを書くという実践を重ねていくことが重要である。

では、具体的に教師たちは「目標」と「ねがい」をどう描いているのか、実際の資料の中で、「目標」と「ねがい」の内容と、両者の関係について事例を示して説明したい。

Ⅱ. 2009資料と2010資料の事例分析と考察 (以下下線部は筆者によるものである。)

1. 2009資料の分析と考察

(1) 2009資料「ウミガメのはまを守る」の「目標」と「ねがい」の関係性について

*広A教諭=広島県内公立小学校A教諭

単元名：いろいろな環境を守るくふうについて調べよう 「ウミガメのはまを守る」 清水達也 小学4年下 東京書籍		
	目 標	ね が い
広 A 教 諭	ウミガメの保護について書かれている内容を正しく読み取る。 自分の地域の「環境を守るくふう」について情報を集め、分かったことをパンフレットにまとめて紹介する。	身近なところで行われている「環境を守るくふう」を知り、自分たちも関心を高め、環境を守ることの大切さを自分のこととしてとらえ、実践していける子どもを育てる。 <u>本やインターネットだけでなく、実際に活動している方にインタビューするなど相手とのつながりを大切に情報収集を体験させたい。</u>

		集めた情報を項目ごとに整理したり、文章のおまとめり（段落意識）や写真などを効果的に使用して表現することの大切さを、学び、実際の場面で使えるようにしたい。
広B教諭	<p>中心となる語や文をとらえ、段落相互の関係をおさえ、内容を読み取る。</p> <p>中心となる語や文に注目して要点をまとめたり、小見出しを付けたりする。</p> <p>各段落を比べることにより、部分と全体の構造を理解する。</p> <p>環境を守る工夫について、調べたことやあ知っていることを、他の学年の児童に伝えるように分かるように表現する。</p> <p>内容をメモしながら観点にそって聞き取る。</p>	<p>教科書の文章を読むことにより人間の便利な生活を守るために被害にあっている生き物がいることに気づいてほしい。</p> <p>またそういう実態を知り、放っておくのではなく町の人々が積極的にボランティアで保護にのりだしている。そして、小中学生も自分たちでできる活動をしているということに共感し、自分たちも環境を守るために何かできるのではという気持ちをもってほしい。</p> <p><u>自分たちの町の「環境を守る工夫」について調べまとめることにより、知らなかったことに気づいたり自分ができる守る工夫に気づき、行動してほしい。</u></p>
広C教諭	<p>ウミガメの保護について中心となる語や文を見つけ、段落相互の関係をとらえる。</p> <p>環境について調べたことや自分の考えをパンフレットにまとめ表現する。(活用)</p>	<p>実際にあったことの説明文であるので、より身近に環境のことを感じてほしいと思う。自分たちでもできることを考え見つけてほしい。</p> <p><u>この教材を読み、内容が分かりやすかったのは、構成がよかったことに気づかせ、自分たちが説明文を書くときに活用する「はじめ」「なか」「おわり」の構成のよさを実感させたい。</u></p>
広D教諭	<p>「ウミガメのはまを守る」の内容を正しく理解することができる。</p> <p>書こうとすることの中心を明確にし、自分の集めた情報を上手に活用してパンフレット作りをすることができる。</p> <p>パンフレットの交流を通して相手の書き方、話し方の良さを学ぶことができる。</p>	<p>本文を読むことで「ウミガメ」の保護のために、地域の人や小学生中学生がどんな活動をしているのかを知り、自分たちの身の回りの環境に目を向け、意欲的に調べる学習を進めたり環境問題について考えたりしてほしい。</p> <p>この説明文の書きぶり（文体、接続詞、指示語、順序、写真の活用等）を学び、この学習の最後の「パンフレット作り」に生かしてほしい。</p> <p>書写の学習で学んだことを「パンフレット作り」の題字や見出しなどで活用してほしい。</p> <p><u>御前崎の人々の優しさを感じ、自分も優しい心を持つ人になると思っしてほしい。</u></p>

実際に書かれた4名の教諭を比較すると、「目標」は、ほとんど学習指導要領に準じて書かれているのが分かる。つまり、4名ともに内容を正しく理解することと中学年の指導事項である内容をおさえているのである。また、最終的にパンフレットでまとめるということを目標にしている。

一方、「ねがい」であるが、これについても4名とも大体において、読み取りための方法とパンフレットをまとめるための方法が書かれている。「こういうふうに取り組んでほしい」という、「目標」の具現化がされたものが記されていることも分かる。

しかし、下線部を見ると、4名とも、ここには教材文を読むという活動を通して、自分たちなりに環境問題を考えてほしいという「ねがい」が共通して表されている。おそらく総合的な学習の時間において環境教育を意識した学習がなされていれば、それとリンクさせていける可能性を意図として含んでいると考えられる。単元を構想する上で、他教科との関連はこれからますます重要性を増してくるだけに「ねがい」としては、書かれてくるべきものかもしれない。

そして、広D教諭のもう一つの「ねがい」として「御前崎の人々の優しさを感じ、自分も優しい心を持つ人になると思っほしい。」(波線部)と記述していることに注目したい。ここでは学

習を通して学んだことの中に心情面の育ちも期待していることである。道徳的であるという批判もあるかもしれないが、そこが「目標」に記述されてくる内容と違うところである。学習を通して、子どもに学んでほしいことは環境を守るという事実的な行為だけでなく、その裏にある人としての率直な思いである。もちろん優しさや思いやりは、この授業の中だけで培われるものではないが、教師が授業を構想する上で、常に持つべき「ねがい」として考えられてもいいのではないだろうかと思う。

(2) 2009資料「宮沢賢治」の「目標」と「ねがい」の関係性について

単元名：作家と作品をかかわらせて読もう 「宮沢賢治」 西本鶏介 小学6年下 東京書籍		
	目 標	ね が い
広E教論	作家の生き方と、その作品の拝啓にあるものとのを、関わらせて読み取ることができる。 読み取ったことや調べたことを聞き手に分かりやすく表現することができる。 読書計画を立て、作品を数多く読むことで読書生活を充実させる。	宮沢賢治の生き方を通して、 <u>家族に対する愛情や農業や自然に対する畏敬の念、作品の創作への熱意など一人の人間が当時の人や後世の人々に与えた影響の大きさを肌で感じてほしい。</u> そして、 <u>作品の一つ一つに込められた生命に対する謙虚な気持ちや尊敬の念を感じ取り、自分の生き方に生かしていくことができる</u> と願っている。
広F教論	宮沢賢治の生涯について読み取るとともに作家と作品のかかわりについて自分の考えをまとめて紹介し合う。 *一ヶ月くらい前から宮沢賢治の作品に触れさせておく。	宮沢賢治の生き方を学び、その考え方や生き様を読み取ることができる。 <u>賢治の生き方と自分の今までの生き方と比べ、自分の生き方について考えてもらいたい。</u> 今までも賢治の作品にふれてきているが、再度読み返したり、未だ読んでいない作品にふれたりして読書生活を豊かにしてほしい。
広G教論	宮沢賢治の生涯について書かれたことをまとめ、その理想や生き方について考える。 考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりする。	教材文を読むことを通して、 <u>宮沢賢治が考えたことやしたこと</u> を知り、 <u>賢治の生き方について考えてほしい。</u> 賢治の作品にたくさんふれ、その作品の中に賢治の考え方や理想がどのように表現されているのかを考え、賢治の生き方に対する考えをより深めてほしい。 「グスコブドリの伝記」を読ませたい。 <u>自分の生き方について考えるきっかけにしてほしい。</u>
広H教論	宮沢賢治の生き方について賢治の生き方について感想を書いたり作家と作品のかかわりについてまとめたりする。 書いたことを相手に伝えるように話す。	<u>宮沢賢治の考え方、生き方について考え、学んだことを日々の読書の幅を広げてほしい。</u> 学んだことを相手に分かるように伝えてほしい。

前記が説明的な文章であったのに対して、ここでは宮澤賢治の伝記に注目した。この文章では宮澤賢治の人となり語られ、いわば人物の生き方が描かれている。ここでは「目標」は、やはり4名ともに読み方や、読んで自分なりの考えを持つという学習指導要領の指導事項が押さえられている。また「ねがい」についても下線部のように、自分の生き方を考えるといった内容は共有されている。しかし、広E教論の「ねがい」に着目すると「宮沢賢治の生き方を通して、家族に対する愛情や農業や自然に対する畏敬の念、作品の創作への熱意など一人の人間が当時の人や

後世の人々に与えた影響の大きさを肌で感じてほしい。そして、作品の一つ一つに込められた生命に対する謙虚な気持ちや尊敬の念を感じ取り、(波線部)と記している。ここには、教師の宮澤賢治への熱い思いが逆に感じられる「ねがい」である。かなり宮澤賢治の作品を読み込んでおり、生き方に共感していることが伺われる。教師のこの姿勢こそが、子ども自身に生き方を考えるきっかけとなることが予想される。教師の教材研究の深さが如実に表されている例といってい

「ウミガメのはまを守る」と「宮澤賢治」という文種的に違うジャンルを比較、考察してきたが、ここに記述された「ねがい」は前者は自分たちの生活環境につながっていくものであり、後者は宮澤賢治の生き方から、自分たちの生き方を見つめ直す人間観に向かっているという違いがあった。

2. 2010資料の分析と考察

(1) 「わらぐつの中の神様」の授業デザイン「目標」と「ねがい」の関係性について

浜小A教諭 = 浜松市内公立小学校A教諭

単元名：人物の考え方や生き方をとらえよう 「わらぐつの中の神様」 杉 みき子 小学5年下 光村図書		
	目 標	ね が い
浜小A教諭	登場人物の言動から人物の人柄を読み、その生き方を自分の生き方と比べて考えることができる。	<u>登場人物がなぜそのような行動をとったのか、その人の置かれた立場を想像させたい。</u> <u>ものの見方、価値観を自分の価値観と比べさせたい。</u> <u>友達の発言をよく聴き、自分の考えと比べる中で、話し合う良さを感じとらせたい。</u>
浜小B教諭	人物の人柄や考え方が表れている言葉、場面の様子が現れている表現について視写し、書き込みや交流を通しておみつさんの人柄や大工さんの考え方や心の動きを読み取ることができる。	<u>文章から登場人物の心情、考え方、人物相互の関係をとらえ、自分の考えをもって交流し、読み深めていくことができる。</u> <u>文章に流れる登場人物のあたたかさ、真心をもってものや人に接することができる。</u>
浜小C教諭	行動・会話などから人物像を読み取り、人物の考え方や生き方についての自分なりの考えや思いをもつことができる。 自分の考えや思いを互いに伝え合うことができる。	<u>人物像を読み取る方法として、人物の発した言葉や行動に着目し、そこから人物の気持ちを想像して、人物像を読み取れるようになってほしい。→文脈から読み取る力</u> <u>「なぜこのような行動をとったのか」と疑問を見つける目を養いたい。→文をよく読む、言葉にこだわり、言葉を根拠にした解釈ができるようになってほしい。</u> <u>自分の考えを相手に伝える。その時に、自分なりの根拠も伝えられるようになってほしい。</u>
浜小D教諭	なぜおみつさんは不格好わらぐつを売るのか。 なぜ大工さんは不格好なわらぐつを買うのか。 なぜマサエは雪げたの中にも神様がいるかと言ったのか。 この3つの疑問課題について文章表記してから、その原因を探る。	<u>みかけやうわべで決めつけるのではなく、物事の本質、大切な目で見えない部分に価値を求める、評価できる子になってほしい。</u>

浜小A, B, C教諭は下線部に示されているように、目標に向かって子どもがどう取り組んで

ほしいかが書かれている。また、目標の書き方がかなり具体的な取り組みにまで及んでおり、この作品の読み方が、教師側にかなり定義付けられているようである。

「ねがい」については、それぞれ波線部に注目したい。浜小A教諭は、話し合いに対しての「ねがい」が書かれている。話し合い学習に対する教師の姿勢が伺われる。これに類する浜小C教諭は、根拠を持って相手に伝えることを願っており、学習活動の活性化を願っているようである。こういった「ねがい」は常に他教科の学習にも存在するであろうことが推察される。国語科という枠を超えた「ねがい」と考えてもいいかもしれないが、これも「ねがい」として認めるべきものではある。そして、浜小B、D教諭は、この作品の主題である価値観の相違を認め合う大切さを自分たちの考え方の中に組み込んでほしいという「ねがい」を込めている。作品を通して、主題に迫ることによって、子どもに学んでほしいことが書かれていると言える。これは教師の教材解釈の帰結としては当然かもしれない。

(2) 中学校教材における授業デザイン「目標」と「ねがい」の関係性について

* 浜中A教諭 = 浜松市内公立中学校A教諭

単元名：本の世界を広げよう 「ゼブラ」 ハイム・ボトク／金原瑞人訳 中学2年 光村図書		
	目 標	ね が い
浜中A教諭	主人公の心の成長の足跡を文章表現から説明することができる。	生きること に積極的に なれない主人公が決意をもって生きている登場人物の言動によって、自分を見つめ直し、新たな一歩を歩もうとする。人間が何によって心を動かされ、自身の生き方を見つめ直すのか、 ということ を考え、 自分の生活に生きる糧を得られるように してほしい。
単元名：生きる姿 「走れメロス」 太宰治 中学2年 光村図書		
	目 標	ね が い
浜中B教諭	登場人物の人物像や心情の変化もとらえ事故を省みる。	誇りとは何かという疑問から自分の価値観を形成して いってほしい。 人を信じること、人に信じられることの難しさやすばらしさを 学んでほしい。
単元名：本の世界を広げよう 「五重の塔はなぜ倒れないか」 上田篤 中学2年 光村図書		
	目 標	ね が い
浜中C教諭	書かれている内容を整理し、理解することができる。 説明が難しいので、見ですぐ嫌だ難しいと感じる生徒が多いと思う。 一見難しそうな文章でも順を追ったり図を用いたりして自分で理解できたという達成感を持たせたい。	日本の伝統的な技術に興味を持ってほしい。 修学旅行で本物を目にして古さだけでなく、現代にも生かされている技術 を肌で感じて ほしい。 将来を考える上で大工などには伝えられている技があることを知ってほしい。

次に中学校国語科教師の「目標」と「ねがい」についてであるが、「目標」については3名ともに、学習指導要領に準じた内容になっている。しかし、浜中C教諭は、目標を具体的に組み

むための教師の「ねがい」（下線部）が書かれてしまっている。このことは授業デザインを書き込む上では、必然的な現象かもしれない。授業デザインはあくまでも構想のためのツールだと考えると、こういう書き込みが繰り返されながら、少しずつ是正され、自分なりの構想につながっていくのである。

浜中A、B教諭の「ねがい」は、この作品の主題に迫りながら、自分たちの生き方や価値観に組み込んでいってほしいというものであり、前述の浜中B、D教諭と同じ考え方であるといっただけでよい。ここには文学作品に共通している人間観が描かれているため、それに呼応して子どもたちには、生き方を考える糧として是非学んでほしいことであると教師の主張的な「ねがい」と考えられる。

浜中C教諭は、日本伝統の技術のすばらしさに気付いてほしいという「ねがい」が書かれている。これは自分の生活を見直すことが求められている内容である。文学的な文章ではなかった視点で書かれている。したがって、文種によって「ねがい」の内容は、異なってくるのである。また、小学校、中学校間でも文種によって、教材解釈が違えば、「ねがい」に記述される内容は違ったものになるのである。

以上、具体的な「目標」と「ねがい」を見てきたが、結論としては、「ねがい」が「目標」達成のための取り組みをしっかりと行ってほしいという「ねがい」が主に記述されてるようであった。一方で自分が実現したい授業の核心をなす「ねがい」として記述されているものもあった。内容的には、混在しつつも2つのタイプがあった。

一つは、教材の研究から導き出される価値的な内容である。文学作品では、そこに描かれている人間観であったり、説明的な文章からは自分の生活を見つめ直すものであったりする。これは自分が考えていた「ねがい」とも合致していた。

もう一つは、当該の授業のみに限定されるものではない内容である。浜中A、C教諭に見られるような教材の研究から導き出されたというよりも、おそらく「学習者の実態」から導き出されたと思われる、目の前の子どもたちに身に付けてほしい言語力である。これはこの国語の授業だけではない、他教科の授業でも身に付けてもらいたいと思うはずのものである。教師が一貫して持っている、こういう「ねがい」も記述されてくるだろう。

Ⅲ. 成果と課題

1. 成果

本稿では授業デザインが持つ可能性を実際の記述を通して検証してみた。そこには「目標」と「ねがい」の関係について以下のことが明らかになった。

- (1) 「目標」を「ねがい」によって、子どもの具体的な学習活動が目標の具現化として記述されている。また、学習活動の最終目標としては、文種によっては「ねがい」の内容が異なっている。たとえば文学的文章では、主題に沿った内容であるし、説明的な文章では自分の生活を見直す内容が多かった。このことから、「ねがい」に目標の具現化が記述されてきても、構想の段階としては否めない面がある。むしろ、このことを構想の起点として「ねがい」を考えていくことが必要である。
- (2) 授業を構想する中で、生起されてきた内容というより、全く学習指導要領やシラバス、教科書にとらわれない、その教師が常に抱えている内容も記述されている。その内容について

は、「話し合いの力を付けてほしい」といった言語力として付けてほしい力であったり、「思いやりを持ってほしい」といった学級における児童の実態に応じた道徳的な内容であったりしていた。これらも「ねがい」として成立すべき内容である。

このことから、「目標」と「ねがい」について、国語科の授業を考える上で、核心となる要素と捉え、教師が実際に「ねがい」に何を書くものであるかを見てきた。そして、教師の多くは普段から「ねがい」はあまり持っていないことが見えてきた。しかも「目標」の具現化とその期待感が込められた内容が記述が多かった。しかしむしろ、このことが「ねがい」を考える上でのスタート地点に立つことなのではと考えた。「目標」の具現化の中で、教師は子どもに学んでほしいことが生まれてくるのではないだろうか。そして、自分自身の授業へのスタンスが決まり、「ねがい」が明確化してくるのである。

2. 今後の課題

教師が授業を単なる目標達成のためのタスクではなく、あくまでも子どもという人間と、教師という人間がダイナミックに絡み合う学びの場である以上、「ねがい」とはその関係性の中で培われるものである。教師の成長とは授業技術力の向上ばかりでなく、その人間性の構築でもある。そのことは、言い換えれば、教師の主観を鍛えることでもあると考える。「ねがい」はその表れだと言っていいだろう。その主観＝「ねがい」を中心に他の要素と関係づけながら授業が創られていくのである。

今後の課題としては以下のことを進めていきたいと考える。

- (1) 「ねがい」に記述されるべきことの内容のさらなる検討
- (2) 「ねがい」と「目標」及び他の構成要素との関係性の分析
- (3) 授業デザインを基にした単元学習及び授業の実践研究

む す び

授業デザインは、授業構想という教師が描く授業のイメージである。ここから指導案が書かれ、授業へと展開していく。その端緒となるべき存在である。特に「ねがい」の存在は大きい。授業デザインの推進者である目黒悟氏は「『ねがい』は他の誰でもない、自分が教える人として学生の前に立つ意味である⁷⁾」と述べられるが、「ねがい」とは「教える人」としての「人間観」や「文化観」といったさまざまな高次のレベルでの観の集まりと言っていいだろう。「ねがい」のあの授業がそのダイナミックスを支えるのである。

7) 目黒悟「授業デザイン 大事なことは書き方じゃなくて考え方!!～ねがいの明確化～」『看護展望』Vol.35 メヂカルフレンド社 2010.5 p.63

この論稿は看護教育を対象にしたものであるが、目黒悟氏は小中学校教員に向けては教育実践臨床研究として位置付けて、授業デザインを推奨し、この研究のリーダー的存在である。本研究においても多くの示唆をいただいた。

参 考 文 献

鶴田清司『国語科教師の専門的力量的形成』溪水社 2007

藤岡完治『関わることへの意志』国土社 2000

浅田匡, 生田孝至, 藤岡完治『教師学への誘い』1998

教育実践臨床研究『授業研究と教師の成長を結ぶ』藤沢市教育文化センター 2009

藤岡完治「第6章学ぶことと教えること」『学校と教育とコンピュータ』藤沢市教育文化センター 1992

[2010. 10. 4 受理]